沼津市明治史料館通信

二〇一一年一月
通巻104号

永井久太郎一家と瓜生繁子
（瓜生節子氏所蔵）
後列右から２人目が久太郎、前列中央が玄栄未亡人、その左が繁子。

永井久太郎一家と瓜生繁子
（瓜生節子氏所蔵）
後列が久太郎、前列左端が繁子、その右は久太郎の母すなわち永井玄栄未亡人。

■シリーズ沼津兵学校とその人材　90
　永井玄栄と永井久太郎
■実習生奮闘記！

シリーズ 沼津兵学校とその人材 90

永井玄栄と永井久太郎

津田梅子・大山捨松（結婚前は山川姓）・瓜生繁子（結婚前は永井姓）・吉益亮子・上田悌子の五名は、アメリカに渡った最初の女子海外留学生として知られる。女性の社会的進出の原点のような存在として、近年に至るまで彼女たちは注目を浴び、関連する書籍の刊行が相次いでいる。

五名の内、瓜生繁子は沼津病院医師永井玄栄の養女、沼津兵学校資業生永井久太郎の義妹であり、明治初年の沼津で数年を過ごしたことは、本紙第五号、第四〇号などでも触れたことがある。繁子の実家は幕臣益田家であり、三井物産初代社長になった益田孝が実兄にあたる。明治四年（一八七一）新政府が女子留学生を募った際、益田は永井家に諮って繁子を応募させ、弟益田克徳を沼津へ迎えによこしたといういきさつも知られる（『自叙益田孝翁伝』）。

しかし、繁子の養家永井家については、生田澄江『舞踏への勧誘　日本最初の女子留学生永井繁子の生涯』（二〇〇三年、文芸社）、同『瓜生繁子　もう一人の女子留学生』（二〇〇九年、文藝春秋）という最新の伝記的研究においても、あまり詳らかにされていない。

そもそも、明治四年一一月文部省が発した「米国留学免許候事」という辞令には、「静岡県貫属永井久太郎娘　永井繁辛未十一歳」と記され、なぜか玄栄ではなく久太郎の娘とされている。静岡県が開拓使に提出した書類にも、「養妹」と記したものと「養娘」と記したものがあり、そのためか後の文献では玄栄・久太郎を混同する錯誤が生じた。

最近判明した事実をふまえ、永井家について改めて整理してみる。

繁子の養父、永井玄栄は静岡藩の沼津病院で三等医師並をつとめた人であるが、その前歴は益田孝と同じく幕府陸軍の騎兵に属した医師であった。文久期には箱館奉行所に勤務し、ロシア領事館の医師ザレンスキーに師事したり、箱館医学所の頭取、五名の内一名になったりしていた（『函館市史　通説編　第二巻』）。東京の菩提寺にある墓石には、「慈照院釈玄栄居士　明治三年二月十七日」と彫られており、沼津病院在職中に亡くなったことがわかる。夫人は明治四一年（一九〇八）四月二六日に亡くなっている。瓜生繁子が残したアルバムには、玄栄のものはないが、養母であったその妻の晩年の写真が残されている。

繁子は、沼津では習字・漢字を教える「寺子屋」に通うなどしていた。留学時の書類が誤記でなければ、玄栄没後は義兄久太郎の養女に変わったのであろうか？

玄栄の長子である永井久太郎は、明治三年三月及第し、沼津兵学校第五期資業生となった。同期には、留学前に繁子の許嫁になっていたと思われる人見留三郎がいた（人見は後に三井物産大阪支店長）。亡父の医業を継ぐためか、翌年には静岡病院生徒に転じた。廃藩前後の動向は不明だが、明治五～六年頃、造幣権頭として大阪の造幣寮に勤務した益田孝とともに大阪にいた形跡もある。八年（一八七五）工部大学校に入学、鉱山科で学んだ。一四年（一八八一）第三回生として卒業、工部省鉱山局八等技手となった。その後官を辞したらしく、翌年には横浜商業学校の創立に際し英語教授に就任し、「黄八丈の着流しで教壇に立」ったという（『Y校百年史』）。

やがて同校も辞したのか、二四年（一八九一）頃には東京海上保険株式会社の英文通信を委嘱されていた（稲垣末三郎『各務氏の手記』と「滞英中の報告及び意見書」、一九五一年、東京海上火災保険株式会社）。同社の支配人は益田克徳であり、三井物産益田孝のコネクションによる仕事であろう。

その後、鉱山業に乗り出し、青森県西津軽郡、秋田県北秋田郡、北海道亀田郡、栃木県安蘇郡、宮城県柴田郡などで、マンガン・銀・銅・鉛の採掘を行ったらしい（『特許採掘一覧』明治二八・三一年）。四〇年（一九〇七）には日本硫黄株式会社に入り、専務取締役をつとめた（『現代人名辞典　第二版』）。

大正六年（一九一七）一〇月一九日、六一歳で没。戒名は普光院釈慈久居士。繁子よりも五歳ほど年長だったことになる。新聞の死亡広告には、親戚総代として益田孝・男爵瓜生外吉ら、友人総代として馬越恭平・乙骨兼三らが名を連ねた（『東京朝日新聞』大正六年一〇月二一日）。大正三年（一九一四）時点で、旧幕臣を中心に結成された歴史愛好会、江戸旧事采訪会の会員であり、会誌『江戸』第九巻第三号（大正七年刊）にも死亡記事が掲載された。

息子久雄は、技術者として大林組につとめた。娘は四人おり、四女アイ子は、大正元年（一九一二）古河鉱業出身の実業家中島久万吉の媒酌で、東京高等商業学校卒で古河合名会社勤務の茂野吉之助と結婚した。紹介の際、久太郎は中島に条件を提示し、「永井は相当に酒を飲んで、家庭の人々を手古ずらした関係もあり、旁々娘の婿には酒を飲まぬ人、というのが絶対条件だった」という（『茂野吉之助』、一九五七年）。なお茂野の伝記には、久太郎は三井鉱山（明治四四年創立）の技師だったとされている。

明治四三年（一九一〇）には四谷区東信濃町、四五年頃は赤坂区氷川町、死亡時は芝区三田綱町徳川邸内に住んでいた。この徳川邸は、伯爵徳川達孝（田安家）の屋敷であると思われるが、永井が同家とどのような関係を有したのかは不明である。その後、永井家は東京駒込に住んだが、昭和二〇年（一九四五）二月の空襲で丸焼けとなり、一切の家財を失ったという。そのためか、資料も残存せず、沼津兵学校に関しても、瓜生繁子が一時養女になっていたという事実についても伝承が途切れた。

〈協力者〉永井久雄様、瓜生節子様、聞成寺様

（樋口雄彦）

実習生奮闘記！

「学芸員」の資格取得を目指す学生は、各大学の課程で必要な科目を履修し、大学内での実習を済ませると、全国の実習生の受入れをしている博物館で館務実習をします。学校の先生になるには教育実習が必要なように…。今年は８月25日～９月10日の日程で４名の大学生を受け入れました。さあ、修行の始まりです。

★初日★
ガイダンスと館内の見学
空調設備の故障により複製に入替えていた資料を本物に戻す。

えっ！いきなり展示作業？原資料に触るの怖い！

大量の蛍光管！高所作業に唖然！

★2・3日目★
３階展示室蛍光管の取替え
ぬましんストリートギャラリーの展示計画

タイトルは「近世・近代書画名品展」史料館にはどんな書画があるのかなぁ？まずそこからわからなぁ～い

★4日目★
歴史講演会の会場設営・レジュメ作り・図録販売・受付など

歴史講演会の様子

看板作りからレジュメ印刷図録販売のおつり準備準備することがたぁ～くさん!!

★5・6日目★
ぬましんの展示準備
作者紹介・書の翻刻・解説のパネルやキャプションを作る
展示のシミュレーションなどなど

むっむずかしい!!

★7日目★

ぬましんストリートギャラリーでの展示作業

緊張するなぁ!!

★8日目★
第２収蔵庫内の資料棚を移動

文書箱に詰められた膨大な資料を移動させるとなると、はっきり言って「体力勝負」です。物資料はかさばるし、文書は埃っぽいし…。もっと広い収蔵庫があればなぁ…。愛情と専門知識で「もの」のお世話をするのが学芸員のお仕事です。がんばりましょう!!

★9日目★
「戦争体験を記録する会」準備・参加

貴重な体験談を記録・保存する…これも博物館のお仕事です！

★10日目★
戸田造船郷土資料博物館・松城邸・歴史民俗資料館を見学　各館の学芸員と面談

館ごとに抱える問題はそれぞれ。理想は遠い…

手間のかかる地道な作業。博物館の根本を支える大切な仕事なのです。

★11日目★
資料整理…絵葉書・古写真の整理、封筒入れ

★12日目★
４階展示室を「沼津の戦争」から「子どもたちが描いたわがまちからの富士山」に展示替え
最終日に発表する「明治史料館　沼津の歴史コーナー　リニューアル案」のプレゼンテーション準備

★最終日★
プレゼンテーション・反省会
お疲れ様でした！

実習生の一人に感想を聞きました。「実習を終えて」

私が「学芸員」という職業に興味を持つ様になったのは、高校時代に明治史料館で行われていた学芸員体験講座に参加したことがきっかけである。講座では、学芸員の主な仕事内容や博物館の設備について講義を受け、巻物や軸装等の資料の扱い方を学んだ。幼少の頃から歴史が好きで将来は歴史に関る仕事がしたいと考えていた事もあり、学芸員の資格取得を志す様になった。そして４年後、縁あって明治史料館で館務実習生として実習をさせて頂いた。講座や大学の授業で学芸員の仕事やその忙しさは理解しているつもりだったが、実際に体験してみると、自分が想像していた以上に多岐に渡る業務をこなさなければならない事にとても驚いた。その中でも印象深かった事が二つある。

一つめに展示が挙げられる。いつも何気なく見ていた展示品やキャプションに、かなりの準備期間・綿密な展示計画がある事に驚いた。キャプションの文章作成では、子どもからお年寄まで幅広い年代の方が読まれるため、簡単すぎず、難しすぎず、かといってつまらないものにならない様に言葉を選ぶ作業がとても大変だった。同時に、常に幅広い分野に視野を広げ、知識を蓄積することが重要だと痛感した。

二つめは地域との関りである。「戦争体験を記録する会」に参加させて頂いたが、戦争体験者の方達から戦争中のお話を伺い、教科書や本を読むだけではわからない戦争の生々しさ・残酷さ・愚かさがひしひしと伝わり、戦争に対する認識が変わった。戦争に限らず歴史は主に中央で起きている事に焦点があてられがちだが、現在私達が住んでいる地域で何があったのかを知る事で、中央の歴史が違った角度から理解出来る様になるし、その逆もまた同じである事を学んだ。現在核家族化が進む中で歴史、とりわけ地方史は次の世代へ語り継がれる事が少なくなっている。人々の記憶や出来事を伝えられるのはやはりその地域の博物館である。地域の博物館としての在り方、という事を考えさせられた。

実習を通して「ヒト」に「モノ」を伝える事の難しさ、もっと視野を広げて様々な分野に関心を持ち勉強する事を学んだ。この実習で学んだ事、得た事を活かし、将来に向って一歩一歩進んでいきたいと思う。

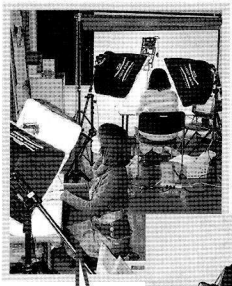
日本大学文理学部　史学科４年　菅沼麻衣さん

収蔵資料のデータベース化を進めています！

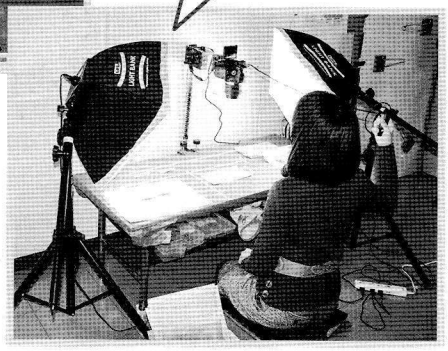
当館では約13万件の資料を収蔵しています。これらの資料をそれぞれ１件ずつ保管用の封筒にいれ、分類ごとに箱詰めし、収蔵庫に保管しています。そして主な資料群ごとに『沼津市明治史料館史料目録』が刊行され、展示や調査・研究など必要な場合の検索に使われています（現在42冊刊行）。莫大な資料の中からお目当の資料を探すのはけっこう大変です。そこで、資料をデータベース化し、検索・管理などが簡単に出来るようにすることにしました。

データ入力作業の様子

原資料を広げ、寸法を測ったり状態を見ながらの作業です。



原資料にスケールをあて、撮影専用のライトのもと、一点一点撮影します。



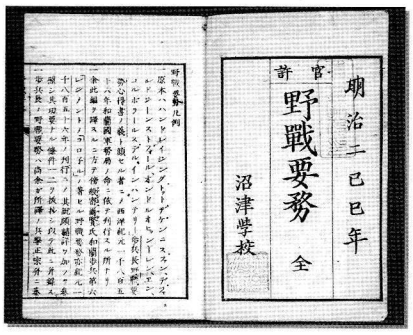
資料撮影作業の様子

昨年11月から専任のメンバーを入れ、データベース化のためのデータ入力、さらに原資料の出し入れを最小限にするための資料撮影（デジタルデータ化）などの作業を行っています。

将来的には、インターネットでの資料検索が可能になり、資料を利用する皆様のお役に立てることになると考えています。

新収資料の紹介　明治史料館に仲間入りした資料をご紹介します。

『野戦要務』　明治２年　沼津学校刊



本資料は「沼津版」のひとつです。沼津版とは、沼津兵学校で教科書として刊行されたものです。『野戦要務』は、慶応元年(1865)に大鳥圭介が翻訳、陸軍所が刊行したオランダの兵学書で、沼津兵学校で再版されました。慶応元年版では緒言に大鳥の名がありますが、沼津版では削除されています。これは、刊行当時、箱館戦争後で大鳥が獄中にあったためと考えられます。

沼津版としては、塚本明毅の『筆算訓蒙』を始めとして数学、英語、フランス語などの新しい書籍が翻訳・刊行されましたが、兵学書については、この『野戦要務』の他に『仏蘭西歩兵程式』（大鳥圭介訳）・『兵学程式』（訳者不明）など幕府の陸軍所が刊行したものが再版され、新たな兵学書の刊行はされませんでした。この辺りにも、沼津兵学校の特色が表れていると言えそうです。

沼津市明治史料館通信
第104号
平成23年1月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL055－923－3335
FAX055－925－3018
印　刷
みどり美術印刷株式会社

３階「沼津の歴史」コーナー リニューアルしました！

当館３階南側の沼津の通史を紹介するコーナーを、一部リニューアルしました。

戦国時代後期から現代までを、所蔵資料を中心に展示し、沼津の歴史の流れを見ることが出来ます。

ぜひご来館ください。